短歌

容赦なく照る干魃に大半は枯れてしまいぬ露地苺苗
朝な朝な刈り来る父の草かごにどくだみの香の強き彼の頃
まれに咲く里芋の花久々に草取りに来て珍らしと見る

市川セイ

妻の声「しろが咲いたヨ！」朝の庭丹精こめた喜び響く
土手の中繁れる草に囲まれてひまわり一輪黄金に光る
葉の繁る公孫樹並木のトンネルを夫婦で歩き気分は緑

植田　稔
（なぎさ短歌会）

つぶら実の紫式部色白と一枝一枝に夏日かたむく
御社（みやしろ）の秋も深まりもみじ葉の然（さ）やかなりしや季節（とき）の音ふる
繕（つくろ）えばまだまだいける品揃えコロナで買物控えたりして

大澤清水

麦秋のむぎゆたかなり車窓より麦刈る人を見て駅を過ぐ
ほろほろと百日紅の白きはな散歩のみちに散りくるあはれ
齢とれば過去ふりかへること多し追憶とともに生きゐる我か

太田　博
（歩道短歌会）

朝まだき病院の庭に金木犀香り清（さや）かに流れ来るなり
アフガンの厳しき現場　編物の優しき響き甦れよ
カランコエ窓辺の風に揺れてゐる私も台所（だいどこ）で踊つてゐる

唐沢　小夜子

KI－KO

服たたむ　鼻歌まじりに　笑み浮かべ　見つめる君に　面映い僕
12年　ありがとうねと　手紙添え　カギとリングと　二人の写眞
まだ今も　夢見る君は　遠い過去　瞳揺らして　悔恨紡ぐ

ききょう

壁に掛くドライフラワーセピア色色褪せたのか色づいたのか
身勝手なヒトの行為で傷ついて地球(ほし)の涙の水位は上昇
缶ビールたたみいわしと彼の島と寄せる波間燥いだ笑み思ふ

木村恵理

二重虹　一世一代晴れ舞台試練乗り越え記念日となる
こっちだよ声響き呼ぶ　つがい鳥実を食さずあみの虫(盗)とる
元気なれ　黄花のバラ樹肥料まき若木生き生き生命の力(りき)

黒田良子

もう五年まだ五年かと靴磨く居(い)るのに在(い)ない亡(あな)き夫の靴を
今は亡き母と短歌(うた)詠む秋の日の一夜(ひとよ)のありて我はうた詠む
亡き夫の上着の衿のあたりより残り香さがす風はもう秋

小橋和子

ボール投げ犬と戯れし双子の孫前に進んではあとずさりする
心筋梗塞に突然逝(ゆ)きし我が友よ心の洞(ほら)を埋めるすべなし
恩師より寒中見舞の文(ふみ)届く喪に服しゐる睦月(むつき)のひと日

常保恵美子

花のようにいつもきれいな唐辛子宝たからのノーベル賞生む
ワクチンを二回終りて義務果たしホッとして居る旅も待ってる
「海ゆかば」…リズム好きです歌詞を変え静かに歌う（唱う）鎮魂の夏

高橋美津子

吾が腕ささえ傘さしくるる施設長の若き力にときめく八十なり
回り道お花見しようとドライバーの洒落た計い歓喜な老等
食道に白き黴あると映像を横目に聞きぬ処方薬を飲む

散らし書きの案に迷ひて庭に出るラルゴの風の光る白梅
短調から長調へ声変はりゆく籠もりたる日の長電話良し
自粛後に会ひ得た孫は声変はりヌーと背は伸びハグは差止め

竹中亮子

青春のほんの残りの想ひ出をあたため直す老の胸うち
さるすべり最後のひとひら散る坂を少し惚けた夫に寄り添ふ
花期終えし白鳥草が又咲きて少し感動秋静かなり

田中依子
（なぎさ短歌会）

スポイトの水をぴちゃぴちゃなめる猫残りわずかな命と思う
閉ざされた部屋の窓開け満開の桜見詰めて一歩踏み出す
走り来し野良猫二匹目を細め尻尾を立てて餌ねだりおり

田村孝子

箱根路に母を誘いて湯を巡り楽しき中に母の老いを見ゆ
三度来た馴染みの宿にはしゃぐ母「良い所だね、初めて来たよ」と
変りゆく母の姿に戸惑いてデイサービスの日が増えゆく

角田美香

過ちは繰り返すまいヒロシマの固く誓いし原爆の日に
コロナ禍の猛暑酷暑に息苦し加えてマスク青息吐息
五輪旗の波間に映えて碧き空江の島沖に風切るヨット

戸村忠子

カーテンをあければ空をうす雲が掃きたるごとくやわらかく伸び
チューリップ花びら散りて哀しけれひとひらひろい押し花にせり
庭にありしぶどうの棚を思ひ出ず背をかがめつつ摘みしことあり

西田朝子

夏休み子等つれ里にて夕涼み花火ににぎわう昭和の一日（ひとひ）
甘夏の若葉出そろいゆらゆらと枝のゆれてる初夏の昼すぎ
朝毎にディサービスへ母送る笑みつゝ手を振る近所の青年

広瀬洋子
（なぎさ短歌会）

リユウグウの土産地に置き「はやぶさ2」は再び次の任務へ向かう
ペンチまで持ち出し殻を割りくれし夫に銀杏の素揚げ勧める
洋蘭のピンクの蕾膨らみて咲き揃ふまでわれは気を揉む

見米素子
（花舟湘南短歌会）

遠き日の園（こ）児より届きし新年に折鶴二羽の幸の舞いくる
天高く空一面のうろこ雲渡りてみたし丹沢の峰へ
賀状くる半世紀経て歩む友恋人の名は酸素ボンベとう

森睦子

身を寄せてブルーベリーは実りたり君の好みし深き紫

うつむきて清らな佳人の立ち姿夕光(かげ)に映ゆ白き浜木綿

ひっそりと貝母(ばいも)は冬を生き抜きて淡きみどりの花咲かせをり

山本澄子